



小粒でもピリリと辛い3つのお話

上田八木短資特別顧問（前パラグアイ大使）
弁護士

上田 善久

縁あって2014年春から3年間、南米内陸のパラグアイ共和国に大使として赴任し、その在任期間中に『小粒でもピリリと辛い』3つの事柄を実感しました。

1つ目の『ピリリ』は、当地日系社会の放つ独特の存在感です。南米移民といえば明治以来の何百万人ものブラジル移民社会が想起されますが、パラグアイ移住者の大宗は昭和30年代の国策による農家集団移住で、我々と戦後の同時代を異国で生き抜いてきた人々です。彼らはその後この国の基幹産業となる農業の発展に大きく貢献し、その子女は日本語や日本文化を維持しながら商業、医療、金融、芸術といった分野でも活躍、わずか1万人の『小粒』な日系社会の功績は現地で大きな敬意や高い信頼の源となってきました。

日本人移住80周年の2016年には在パ日本人会連合会は各種の文化イベントを展開、それに呼応するように上下両議院で移住社会への感謝決議がなされ、さらに眞子内親王が一週間にわたり各地を巡られ、日系社会と地域社会融合の祭典が全国で盛り上がりました。残念なのは、戦後しばらくの間は華やかだった移住事業そのものが、何故か肝心の日本で忘れ去られていることです。

2つ目の『ピリリ』は、小国パラグアイの南米での存在感です。19世紀後半の3国（伯、亜、ウルグアイ）連合軍との戦争で壊滅的敗北を喫して以来、貧しい『小粒』に甘んじていましたが、近

年、左派ポピュリズムで変調をきたす近隣諸大国を尻目に、安定した政策運営と内外からの投資増で大規模商業ビルが次々と完成、街の景観が大きく変貌す

るだけでなく政治的にも徐々に『ピリリ』とした存在感を示しています。これから南米地域戦略を考えるに当たり、パラグアイからの視点も加えていく必要があるようです。

3つ目の『ピリリ』は日本の伝統文化です。筆者は大学の4年間茶道部で茶道を実践していたので、大使館所蔵の茶道具を使って大使公邸の別棟に茶室を設え、大統領はじめ各界の人々を頻繁に招いてお点前を披露しました。何の説明がなくても自然に凜とした緊張感を与える茶室、この『小粒』の空間が醸し出す『ピリリ』とした一体感。伝統の持つ不思議な力に今更ながら驚かされました。

世の中とかく規模の大小で図りがちですが、『小粒』が放つ『ピリリ』感にはなかなか捨て難い独特の味がある、このことを実感した本当に貴重な3年間でした。

